

第1章

鳴門市観光の現状と課題



第1章 鳴門市観光の現状と課題

(1) 近年の観光を取り巻く動向とキーワード

ここ数年の日本社会を取り巻く環境は、人口減少、長寿社会、環境への意識向上、ライフスタイルの変化など、大規模なパラダイムシフトが展開され、観光分野においてもこうした社会環境変化を見据えた取り組みが求められている。こうしたなかで、観光産業の動向に影響を与える大きな流れとしては、以下の点が上げられる。

社会環境の変化

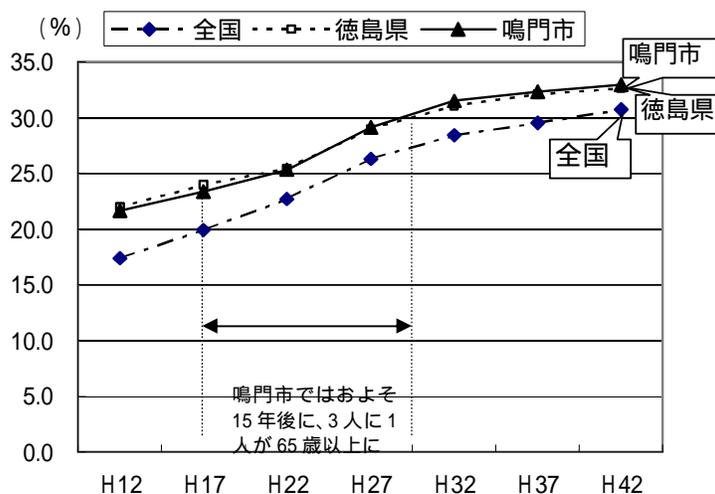
a) 少子・高齢化社会と団塊の世代

人口減少時代に突入した我が国では、平成16年に人口1億2,748万人（低位推計）でピークに達し、以後減少を続けて平成62（2050）年には1億人を下回る見込みである。

出生率の低下に伴い、15歳以下の年少人口は平成12年の14.6%から平成62（2050）年には10.8%に減少する一方で、65歳以上の老年人口は17.4%（平成12年）から35.7%（平成62年・2050年）に達する見込みである。すなわち2.8人に1人が65歳以上人口となる時代が近づいている。また、2007年以降はいわゆる「団塊の世代」が次々に還暦を迎え、高齢化が一気に加速するとともに、時間と経済的な余裕を持ち、社会的にも活躍が期待される人口が増えるものと考えられている。

観光に関する点では、高齢化社会の到来に伴い、バリアフリーやユニバーサルデザインの考えに基づいた交通基盤の整備が進められているほか、高齢者向け割引サービスの拡充等が図られている。

高齢人口の推計値



資料：国立社会保障・人口問題研究所

b) インターネット社会

情報化社会の進展のなかで、インターネットは今や日常生活に必要な情報手段となっている。インターネットの利用人口は平成17年(2005年)末でおよそ8,529万人、国民5人のうち3.5人はインターネットで情報の受発信を行っている換算となる。最新情報に敏感な若者世代のみならず、中高年層の間でもインターネットによる情報収集、選択の自由は広まっており、観光産業における受発信手段としても大きな位置を占める時代となっている。一方で、あまりの情報量の錯綜に「情報が多すぎることは、情報がないに等しい」とも言われ、情報の質が問われる時代でもある。

観光産業の電子商取引市場

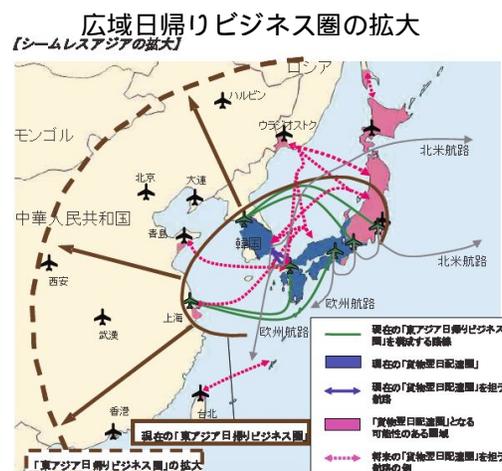
(単位：億円)

年	旅行市場規模	旅行に関わる電子商取引市場規模	電子商取引率(%)
1998年	160,000	80	0.05
1999年	153,300	230	0.15
2000年	152,500	610	0.40
2001年	150,600	1,190	0.79
2002年	140,000	2,650	1.90
2003年	139,000	4,742	3.41
2004年	140,600	6,610	4.70
2007年予測	150,000	18,000	12.10

資料：平成18年版「観光白書」

c) 高速移動圏の拡大

高速交通網の整備により、主要都市からの移動圏域はますます拡大を見せ、国内だけではなく、東アジア圏域も今や1日行動圏となっている。この動きはさらに加速する動きにあり、将来的には4時間以上の仕事ができる東アジア日帰りビジネス圏の拡大など、シームレスに向けたインフラ・ソフト整備が進められていく見込みである。観光の視点からは、県境や圏域にとらわれず、より広域を短時間で移動することが可能となるため、圏域内の空港・港湾・鉄道・IC・高速バスターミナル等と観光資源とを結ぶ二次交通の整備が人の流動を決定づけるキーポイントとなる。



資料：国土交通省「国土形成計画素案 参考資料」

シームレス：継ぎ目がないこと。新たな国づくりをめざす政府の国土審議会のなかで、「シームレスアジア」の実現が提唱されており、東アジアとヒト・モノ・情報の迅速かつ円滑な流れによる一体的な発展が求められている。

価値観の変化

a) 「体験型」への関心

未知なものを体験したり、趣味や学習を通じて新たなものを知る喜び、創作する楽しさに価値を感じる人も増えている。観光においても、体験をキーワードに地域の資源を再発見・再演出する例が多く見られ、訪れる人と地域住民との人的交流を促進する手段としても推進が図られている。地域住民にとっては、地域の魅力を見直し、そのすばらしさに誇りを持つ意識醸成にもつながっている。

b) 田舎へのあこがれ、自然回帰

環境問題への関心の高まりと相まって、都会での生活によるストレスを癒す豊かな自然、人々のつながりが残る田舎暮らしへのあこがれや自然への回帰も近年増加しつつある。自然のなかでの安らぎや潤いを求める志向が強まり、グリーンツーリズムやエコツーリズムの他、中長期的に田舎暮らしを体験するプログラム等の人気が高まっている。

c) 「心の満足」「知的好奇心」を求める動き

生活の質の向上に伴い、消費者の選択眼が鋭くなっているなかで、サービスにワンランク上の質の高さを求めたり、こだわりを満たす希少価値の高いもの、本物志向の人が増える動きも見られる。またお遍路さんの増加に見られるように“自然や人とのふれあい”のなかで自己発見・自己実現をしようとする心の探求など、人々の関心がものの豊かさから自分らしい生き方や、心の満足度を満たすことへと広がってきていることを示している。加えて、脳を活性化させるゲームやクイズが流行するなど、知的好奇心を満たす活動にも強い欲求が見られる。

d) 健康志向・LOHAS

長寿社会のはじまりとともに、いかに健康で明るく暮らしていくかも大きな関心を集めている。ウォーキング、ヨガなど健康に気を遣いながら地球環境にも配慮し、精神的にもゆとりあふれた生活スタイルを最優先していこうとするLOHAS（ロハス・Lifestyles Of Health And Sustainability）の概念が生まれ、安全で安心できる新鮮な食材に対するニーズも高まりを見せている。オーベルジュ（郊外型のフランス料理を楽しむレストラン+宿泊施設）のような新たな動きも広まりつつある。

e) オーダーメイド

行きたいところ、食べたいもの、体験したいことなど、個々人のさまざまな要求をピンポイントに満たし、数ある選択肢のなかから組み合わせることが出来る自由度の高いオーダーメイド型の消費も増加している。高齢者向け、若い世代向け、子ども連れなど、形態によっても世代によっても、訪れる地域によっても異なるさまざまなニーズを満たすためには、自治体や民間単独でのサービス提供では及ばないことも多く、民間・住民・行政がさまざまなレベルで連携しあい一体となったサービス提供が求められている。

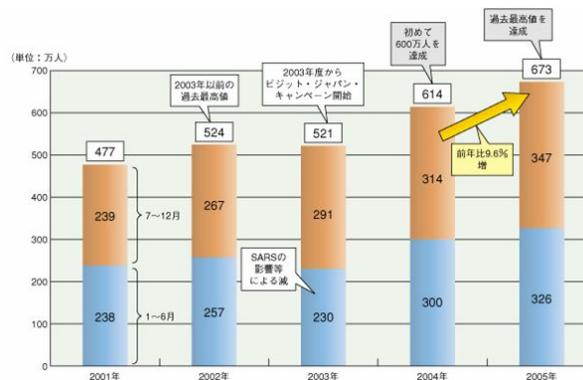
観光に関する国の動き

a) ビジット・ジャパン・キャンペーン「Yokoso! Japan」

国土交通省では、「観光立国の実現」をめざし、2010年（平成22年）までに訪日外国人旅行者数を1,000万人に倍増させることを目標に、『ビジット・ジャパン・キャンペーン』を実施している。これは、政府、自治体、民間企業等が一体となり進めているもので、ターゲットとしている国・地域ごとに打ち出すべき日本の魅力を設定しているほか、青少年交流（訪日教育旅行）の促進を進めている。（ex. 国土交通省「観光ルネサンス補助制度」：（四国）愛媛県松山市「宵まち歩き 道後旅情」）

国・地域	主に対象としている層	具体的手法
韓国	若年層、熟年層	教育旅行、テーマ性のある目的型ツアー、ゴルフ・スキーなど高付加価値型ツアー
台湾	教育旅行の学生、20～30代女性、家族層	スキー、温泉、日本の四季、ショッピングなどの日本の多様な魅力
米国	シニア層、高所得者層	伝統工芸の体験や寺院の日本庭園など日本の文化的、歴史的な観光地、富士山や桜など自然の美しさ、都市の現代文化
中国	私企業経営者、ホワイトカラー、専門職	旧正月の旅行商品、日本の典型的・代表的な自然（富士山など）、文化（京都など）、現代（秋葉原の電気街など）を含むルート
香港	20～40代の有所得者	都市文化、日本の自然、日本食、ショッピング、ポップカルチャー等の日本の多様な魅力
英国	中高年の富裕層、若年層	日本の伝統と現代の両面性、日本の食文化、オーストラリアへの乗り継ぎの旅行
フランス	中高年の富裕層、若年層	日本の伝統と現代の両面性、日本の食文化
ドイツ	中高年の富裕層、若年層	日本の伝統と現代の両面性、日本の食文化
オーストラリア	ヨーロッパの乗り継ぎ旅行者、ウィンタースポーツ愛好者	日本の文化の多様性、雪質が良く、設備の整ったスキー場
カナダ	シニア層、高所得者層	伝統工芸の体験や寺院の日本庭園など日本の文化的、歴史的な観光地、富士山や桜など自然の美しさ、都市の現代文化
タイ	高所得者層	日本の自然、日本食、アミューズメントパーク、ショッピング
シンガポール	20～40代	都市文化、日本の自然、日本食

訪日外国人旅行者数の推移



資料：平成18年版「観光白書」

観光ルネサンス補助制度：観光地の国際競争力の向上を促進するため、観光地の活性化に取り組む民間の活動を支援する制度で、平成17年度に創設された。

観光ルネサンス補助制度 対象案件地域

地域名		実施主体	件名
北海道	釧路市阿寒町	NPO 法人阿寒観光協会まちづくり推進機構	阿寒湖温泉 FVS 向上プラン～来阿外国人満足度向上事業～
千葉県	佐原市	NPO 法人コンヴィヴィアル	素顔の日本に出会うローカルバスの旅プロジェクト
山梨県	富士河口湖町等2町村	富士河口湖ふるさと振興財団	富士河口湖町・上九一色村外客来訪促進観光振興事業
新潟県	村上市	NPO 法人村上観光ルネサンス	村上観光ルネサンス
三重県	鳥羽市	鳥羽商工会議所	中部国際空港を核とした国際海洋観光都市づくり事業
大阪府	大阪市(天神)	NPO 法人天神天満町街トラスト	天神天満地域文化・イベント発信事業
兵庫県	神戸市	(社)有馬温泉観光協会	有馬温泉再生事業(健康・“欲ばり”有馬)
和歌山県	田辺市等6市町	(社)和歌山県観光連盟	和歌山『世界遺産観光』推進
岡山県	倉敷市	(社)倉敷観光コンベンションビューロー	観光都市『くらしき』観光ルネサンスプラン 2005
愛媛県	松山市	(財)松山観光コンベンション協会	宵まち歩き 道後旅情
大分県	別府市	(社)別府市観光協会	九州で最も個人旅行に優しい滞在型温泉地『別府』づくり
熊本県	阿蘇市等4市町村	(財)阿蘇地域振興デザインセンター	阿蘇地域観光ルネサンス事業
沖縄県	竹富町	NPO 法人たきどろん	『竹富島どうゆくい(癒し)観光』推進事業

資料：国土交通省ホームページ

b) 人口対流と2地域居住

主に団塊の世代が大量にリタイアする時期を目途として、都市住民の地方への対流を促そうとする動きも進められている。都市住民が週末や一年のうちの一定期間を農山漁村で暮らすライフスタイルである2地域居住は、「都市住民が本人や家族のニーズ等に応じて、多様なライフスタイルを実現するための手段の一つとして、中長期(1～3ヶ月程度)定期的・反復的に滞在すること等により、当該地域社会と一定の関係を持ちつつ、都市の住居に加えた生活拠点を持つこと」と定義され、対流地域における受け入れ態勢づくりの検討が始まっている。(ex. 四国経済産業省「四国地域における長期滞在の推進に関する実践的手法についての調査研究」、四国経済連合会「四国でロングステイ(長期滞在)を楽しむ!」)

c) 美しい国づくり(風景・景観)

恵まれた自然景観や四季の風情、風土に根付いてきた歴史文化資源の町並みなど、地域の特徴ある優れた風景の価値を見直し、住民、NPO、行政等の多様な連携によって守り育てていこうとする取り組みが進められている。同時に、道路そのものを観光資源として活用していこうとするシーニックバイウェイ(日本風景街道)や、美しい景観の写真撮るためにパーキングを整備する「とるば」の設置など、北海道や九州をはじめ、全

d)産業観光政府の観光立国行動計画において、「産業に関する施設や技術等の資源を用い、地域内外の人々の交流を図る観光」として注目されている産業観光は、2000年に愛知県で開催されたフォーラム以来、急速に普及しつつある。地域経済を支えてきた企業活動を地域の観光資源として捉えるとともに、企業にとってもIR活動等を通じて消費者とのコミュニケーションを図っていく新たな手法として受け入れられている。平成18年度からは中部圏をモデルとした具体的施策の展開が進められている。(ex. 四国観光立県推進協議会「四国旅辞典～産業観光～」:(4県登録数)徳島県5、香川県12、愛媛県17、高知県5)

e)フィルムツーリズム

映画やテレビドラマ等のロケーションとしてさまざまな地域の資源を提供することにより地域をPRし、観光振興につなげていこうとする試みも全国各地で行われている。平成16年度にはロケ推進及び映像コンテンツによる地域活性化を目的に、3地域がモデル地域として選定され、自治体、NPO法人、観光協会、地域住民等の地域内の関係組織が連携したワークショップの開催など、ロケーション支援組織の設立に向けた事業が始められているほか、全国のフィルムコミッションのデータベース構築による情報一元化等の取り組みが進められている。

f)サイクルツアー

サイクリングを楽しみながら地域の魅力をゆっくりと堪能する新しいツーリズム(サイクルツアー)を普及しようとする動きも活発になってきている。サイクリングロードと観光施設や川の親水施設、港湾緑地等を結び、連携させることで地域を活性化しようとする試みは全国15カ所をモデル地域として実施され、自転車を利用した観光促進施策が進められている。(ex. 国土交通省「サイクルツアー推進事業モデル地区:(四国)松山地区、しまなみ海道地区」)

サイクルツアーモデル地区



資料：国土交通省

IR活動：IR (Investor Relations)。企業が株主や投資家に対して、投資の判断に必要な財務状況などの情報を提供する活動。最近では、地域社会等に対して、経営方針や活動成果を伝えることもIRのねらいの一つになっている。

g)ヘルスツーリズム

高齢化社会の到来により、人々の「健康」への関心が高まるなか、豊かな自然のなかで心身共に健康づくりを進めようとする新たな観光の動きも見られる。グリーンツーリズム、エコツーリズムに続くものとして検討が進む「ヘルスツーリズム」では、温泉や森林、身体にやさしい医食同源の食素材などを活かし、豊かな長寿社会づくりと観光振興を目的としたものである。国では、今後のヘルスツーリズムのあり方について科学的な検証を始めているほか、シンポジウム等の開催により、広く周知を図っているところである。

(2) 鳴門市観光の現状

地域概要

鳴門市は関西方面から四国への玄関口に位置しており、市の北部は瀬戸内海国立公園に指定され、鳴門海峡の急流と逆巻く渦潮でその名を知られた景勝地でもある。また、日本で初めてベートーヴェン「第九」交響曲が合唱付きで全曲演奏された地としての歴史や文化を大切に受け継ぐとともに、四国霊場八十八ヶ所巡礼に訪れる人々を温かく迎えてきた土地柄でもある。明石海峡大橋の開通とともに京阪神との交通の要衝としての役割も高まっている。

魅力ある鳴門の観光資源

鳴門市には全国的に有名な渦潮をはじめとして、数多くの魅力的な観光資源がある。主な観光資源の特徴を以下の8つの分類で整理すると、次のとおりである。(資源リストの詳細は巻末参考資料を参照)

観光資源の整理 8分類

海洋資源 神社仏閣 歴史文化 食資源	伝統品 交通文化 祭り・イベント・レジャー 風景
-----------------------------	-----------------------------------

鳴門の観光資源マップ



< 海洋資源 >

世界三大潮流のひとつである鳴門海峡の「渦潮」をはじめとして、千鳥が浜、岡崎海岸、大毛海岸などの美しい砂浜があり、ウチノ海のような釣客にも人気の高い海洋スポットにも恵まれている。

海の美しさは定評が高く、淡路島との間を流れる鳴門海峡の他、鳴門スカイラインでつながる大毛島、島田島の橋下には「海峡」と名の付くところが複数存在する、海に抱かれたまちである。

また、海の立地を活用した娯楽施設として撫養地区には鳴門競艇があり、市外からも多くのファンを集める。

渦潮



岡崎海岸



鳴門競艇



< 神社仏閣 >

阿波国を開拓したとされる大麻比古命と猿田彦命をまつり、県下一の格式を誇る阿波一の宮・大麻比古神社をはじめ、四国八十八ヶ所の始点となる第一番札所・霊山寺、二番札所・極楽寺があり、県内や四国、紀伊半島とのネットワークを有している。

また、現存する県内最古の本殿を持つ宇志比古神社、眼の神様として知られる葛城神社、桜の美しい妙見山にある妙見神社、国指定重要文化財の木造弥勒菩薩坐像がある東林院、鬼の骨が奉ってある鬼骨寺など、趣のある寺社が点在している。

大麻比古神社



霊山寺



東林院



<歴史文化>

市西部地区には、全国でも最古級の古墳であると認められた県指定史跡の「天河別神社古墳群」をはじめ、全長 10km にわたる「鳴門板野古墳群」があり、古代からの人々の営みを辿ることができる。今後の調査・研究によっては、学術的にも高い評価を受ける可能性に満ちた地域である。

また、江戸時代から鳴門の地域産業を支える柱ともなってきた塩田は、撫養・高島などに広がっていた。現在では、国指定重要文化財・福永家住宅にその名残を見ることができる。

市東部の鳴門公園周辺には、西洋の著名な美術館に所蔵されている名画約 1000 点を陶板焼き付けにより再現した作品を飾る「大塚国際美術館」があり、市西部の板東地区には第一次大戦で捕虜となったドイツ兵約 1000 人が収容された板東俘虜収容所の資料を保存した「ドイツ館」があるなど、市内の東西を通じて、西洋文化を身近に感じられる機会が多いまちである。

板東俘虜収容所に収容されていたドイツ兵による演奏が、日本で初めての「第九」の演奏であったことにちなみ、毎年6月の第一日曜日に市民による「第九」演奏会を継続的に開催している音楽のまちでもある。

世界的な考古学者の鳥居龍蔵博士の貴重な資料が展示されている「徳島県立鳥居記念博物館」、社会的弱者の救済活動に身を投じ、日本の社会運動の草分け的存在で日本協同組合同盟の結成に心血を注いだ賀川豊彦の資料が展示されている「鳴門市賀川豊彦記念館」など、世界的な偉人の記念館がある。

天河別神社古墳群



大塚国際美術館



ドイツ館



<食資源>

鳴門は新鮮な食材の宝庫である。鳴門海峡の急流で育った「鳴門鯛」などに代表される魚類・貝類の評判は高い。

徳島県が「阿波の名品・徳島ブランド」として位置づけている4点のうち、2点が「なると金時」、「鳴門わかめ」であり、徳島を代表する名産地である。

加えて、従来から「鳴門れんこん」、「竹ちくわ」、「らっきょう」などの産地としても名高い。

近年では、ご当地麺の流行に伴い、柔らかな食感が人気を高めつつある「鳴門うどん」、渦まつり等で楽しむことができる「ジャンボうずしお鍋」、祝いの席でふるまわれる「ごま砂糖がけのお赤飯」、「金時豆入りのお好み焼き」など、個性あふれる食べ物も魅力となっている。

鳴門鯛



なると金時



鳴門わかめ



< 伝統品 >

江戸時代後期から鳴門に伝わる大谷焼は、大きさとそれを焼く登り窯は日本一と評されている。大麻地区には7つの窯元があり、絵付けや作陶体験の人気が高い。平成15年には国の伝統的工芸品に指定された。

昔から塩と並び鳴門の産業を支えてきた足袋製造は、江戸時代にはじまり、明治になってミシンが導入され飛躍的に発展したとされる。

江戸時代に岡崎の蓮花寺の再建祝いに、棟梁があげたのがはじまりとされる「わんわん凧」は、最大のもので直径20メートル、重さ5トンを越える勇壮なものである。

司馬遼太郎「街道をゆく」でも取り上げられたとおり、釣り糸の原型とされるテグスは鳴門市堂浦で生まれ、一本釣り漁法とともに全国に広められた。

大谷焼



大谷焼窯まつり



わんわん凧



< 交通文化 >

美しい海に抱かれたまち、鳴門は橋の多いまちでもある。淡路島とつながる大鳴門橋をはじめとして、小鳴門橋・小鳴門新橋・小鳴門大橋など市内をつなぐ生活道路に架かる橋、ドイツ橋やめがね橋に代表される、まちの歴史文化を映し出す橋などがあり、交通文化の過去から現在が見られる。

高速バス停に設置された「すろっぴー」は、いちはやくバリアフリーに対応して注目を浴びたユニークな乗り物であるほか、市内3カ所で使われている渡船は、その風景が魅力的な資源である。

道としては、かつて藍や塩を運ぶ重要な商業路として栄えた阿波五街道のひとつ「撫養街道」、霊山寺から極楽寺～ドイツ館～賀川豊彦記念館～大麻比古神社をたどる「まほろばの道」など歴史の散策に適した道の他に、北灘沿いに広がる「うずしおロマン

チック海道」や「鳴門スカイライン」など、風景を楽しむドライブにも適した道などがある。

ドイツ橋



撫養街道



岡崎渡船



<祭り・イベント・レジャー>

年間を通じてさまざまな祭り・イベントが開催されているが、最も人気が高いものは県内トップを切って開催される鳴門の「阿波踊り」である。見る者の目線で繰り広げられる栈敷でのダイナミックな踊りと、誰もが参加しやすいアットホームな雰囲気、毎年多くの観光客を集める一大イベントとなっている。

1月には岡崎海岸での「左義長」、2月には「渦開き」、6月には「大谷川ホタル祭り」、10月の「ドイチェス・フェスト in なんと」、11月の「大谷焼窯まつり」など、市内各地区ごとに風土色豊かで観光客も地域住民も楽しめる祭りが開催されている他、10月の「阿波井神社例祭」、11月「大麻比古神社例祭」、「葛城神社例祭」など地区の文化伝統を今に伝える伝統的な祭りも受け継がれている。

8月の「阿波踊り」、「鳴門の花火」、10月の「鳴門渦まつり」などは、市民総出で盛り上げてきた祭り・イベントであり、市内の各種団体、関係組織との連携で支えられてきたものである。

阿波踊り



鳴門の花火



阿波井神社例祭



<風景>

鳴門には、「鳴門公園」、「エスカヒル鳴門」、「渦の道」など、観光の目玉である渦潮や鳴門海峡の風景を一望する施設が整備されている。

加えて、車での移動とともに夕日を追いかけることができる「鳴門スカイライン」や夕暮れ時に穏やかな海に浮かぶ釣り屋形のシルエットが美しい「ウチノ海」は若者のデートスポットにもなっている。

また、鳴門海峡はタカ類をはじめとする渡り鳥のコースとなっており、「鳴門山展望台」は日本野鳥の会の観測ポイントになっているほか、「大谷川」や「櫛木川」、「折野川」沿いはホタルの鑑賞スポットとして地域住民に人気が高い。

日常の鳴門らしさを映し出す風景としては、「一面にハスの花が広がるレンコン畑」や「らっきょうの花畑」、「風に揺らく葉が美しい芋畑」、「わかめの湯通し」、「堂浦の海岸線と家々」などがある。

渦潮と観潮船



ウチノ海の夕暮れ



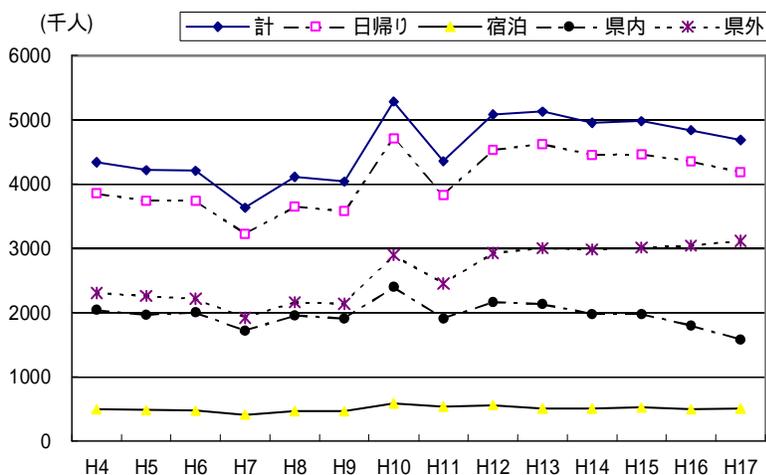
らっきょうの花畑



観光入り込み客の推移と特徴

鳴門への観光入り込み客数は、神戸淡路鳴門自動車道の開通に伴い、平成10年には県内外ともに増加し、翌平成11年に減少したものの、渦の道が開業した平成12年には再び増加に転じ、それ以降は横ばい傾向である。

鳴門への観光入り込み客数の推移



資料：平成18年版 徳島県観光調査報告書

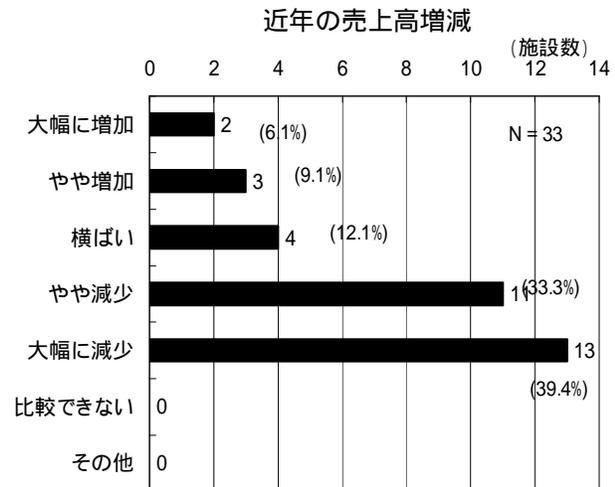
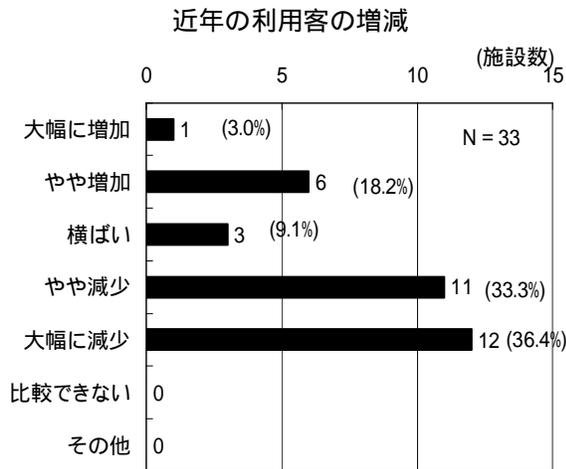
平成10年以降は、「あすたむらんど徳島」の開園等、外因影響により、上記報告書の「鳴門ブロック」（吉野川市、阿波市、松茂町、北島町、藍住町、板野町、上板町を含む）のうち、1割を鳴門市外、9割を鳴門市の観光入り込み客数として推計。なお、「あすたむらんど徳島」の観光入り込み客数は、毎年40万人程度である。

鳴門市観光協会のアンケート調査結果（平成18年3～4月に実施）によると、近年の観光入り込み客数や売上高が「やや減少」「大幅に減少」とする施設は、全体の2/3にのぼり、観光関連事業者の体感としては、鳴門を訪れる観光客が減少していると危機感

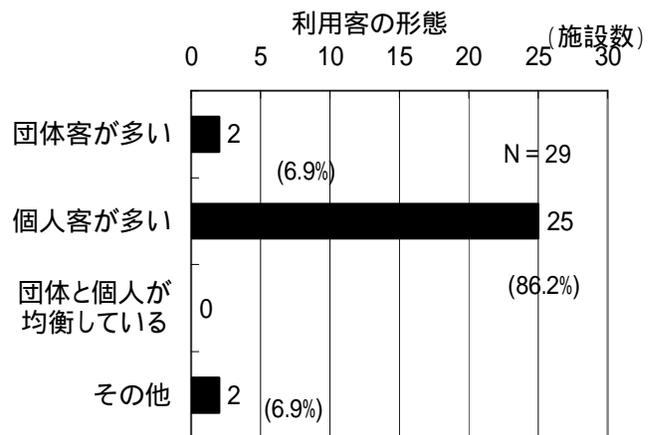
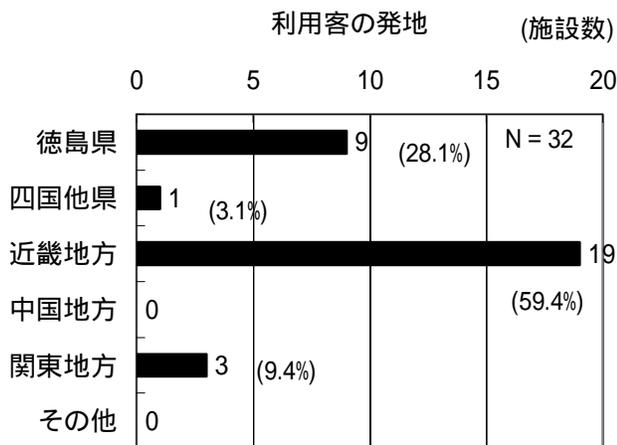
を持っているところが多い。

発地別に見ると、鳴門を訪れる観光客は、「近畿地方」が最も多く6割程度、次いで「県内」(3割弱)となっており、「関東地方」と回答した施設は1割以下となっている。

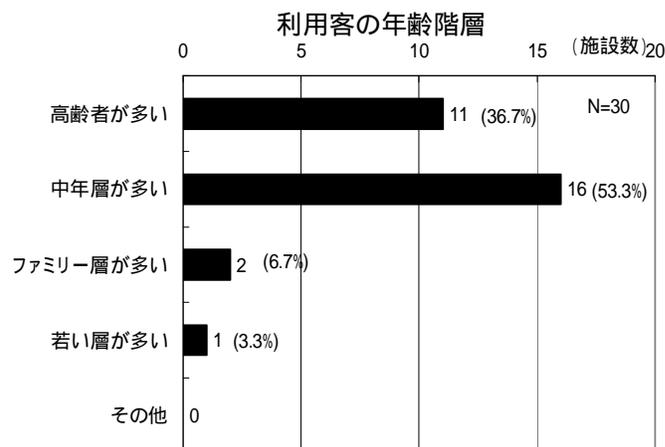
利用客の形態では、「個人客」が最も多く8割以上、また利用客の年齢については「中年層」が最も多く5割程度、次いで「高齢者」が4割弱となっている。



資料：鳴門市観光協会アンケート調査



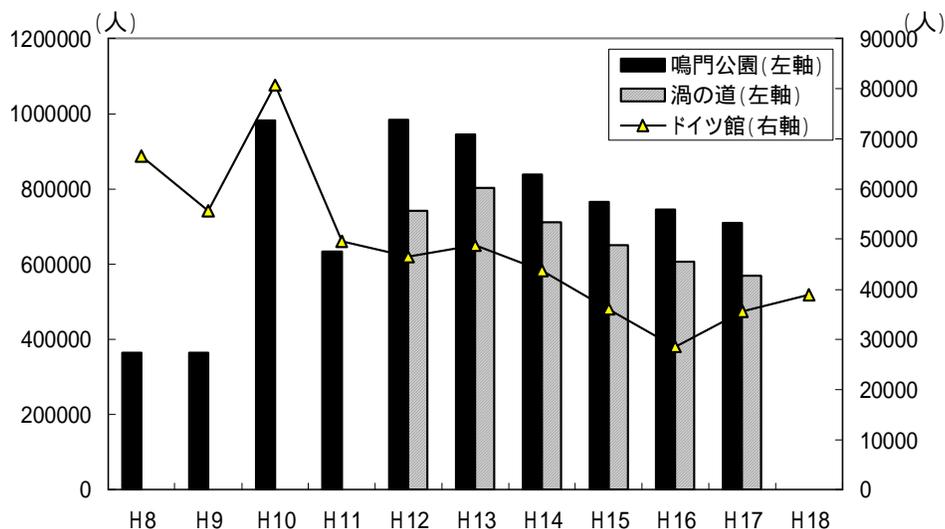
資料：鳴門市観光協会アンケート調査



資料：鳴門市観光協会アンケート調査

市内の主要な観光施設（鳴門公園、渦の道、ドイツ館）の入込み客数の動向を示すと、以下のとおりである。平成 16 年は、台風や天候不順の影響によって大鳴門橋が通行止めとなり、平成 17 年は愛知万博開催の影響を受けたこともあり、鳴門を訪れる観光客数には減少傾向が見られた。しかし、平成 17 年秋からロケが開始された映画「バルトの楽園」の効果を受け、ドイツ館を訪れる観光客が増加し、平成 18 年は半期（1～8月）ですでに前年を上回る入館者数を記録している。

鳴門公園・渦の道・ドイツ館の観光客数推移

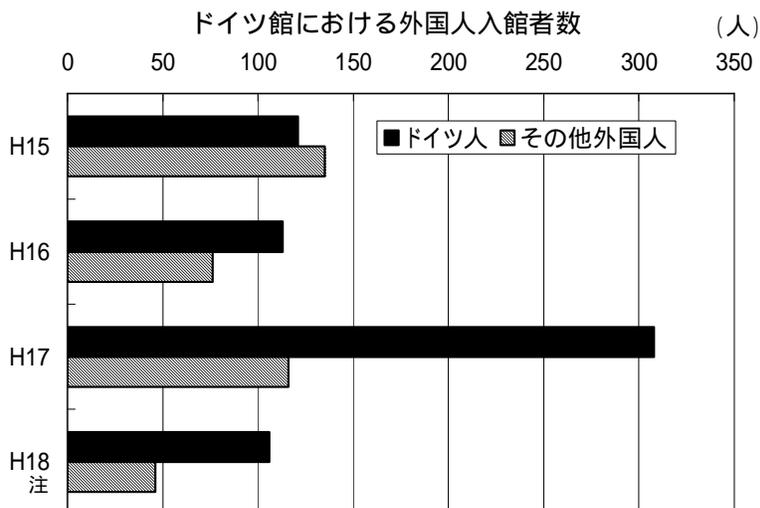


資料：鳴門市商工観光課

各年数値は1～12月のもの。ドイツ館の平成18年は1月～8月まで

ドイツ館の入館者数のうち、外国人が占める割合は約1%弱、その半数がドイツ人である。鳴門とドイツの交流事業の開催等により、若干の変化は見られるものの、鳴門とドイツの歴史的な友好関係と強い絆を示す結果となっている。

ドイツ館における外国人入館者数



資料：鳴門市ドイツ館

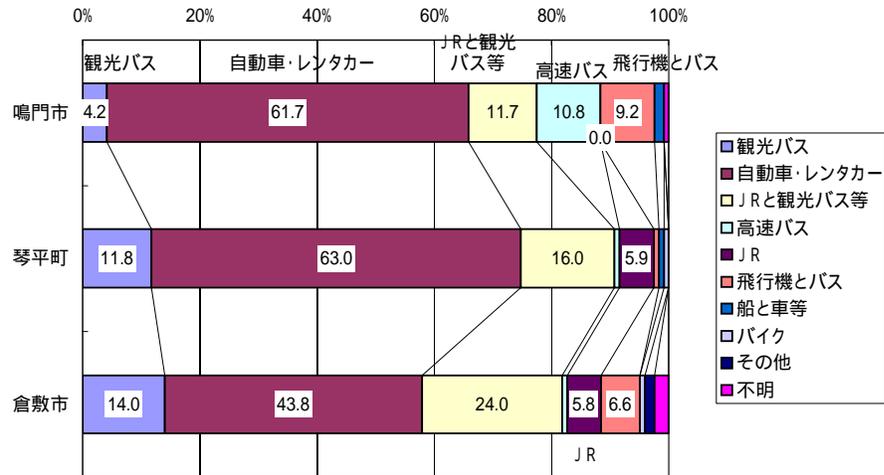
注：平成18年は1月～8月までの数値

交通アクセス

鳴門市を訪れる観光客の交通手段としては、自動車・レンタカーの利用者が6割以上で最も多い。琴平や倉敷と比べると、鳴門への観光客は高速バス利用者が多く、JR利用者が少ないことが分かる。

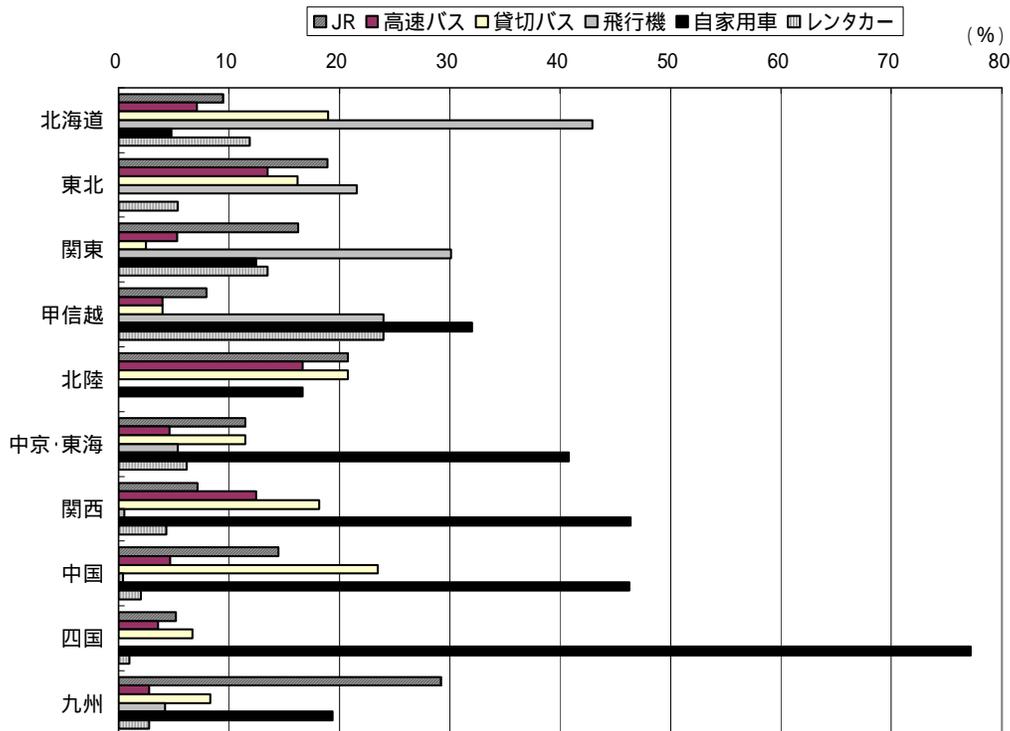
また、徳島県観光調査報告書によると、全国から徳島県に向かう交通手段として、北海道・東北・関東からは飛行機の利用が多く、甲信越・東海・関西・中国・四国内から自家用車の利用が多いことが特徴である。また、九州からはJRによる移動も多い。

鳴門市へのアクセス



資料：瀬戸内三都市広域観光振興のための周遊ルート可能性調査報告書（2004年3月）

徳島県への主な利用交通機関

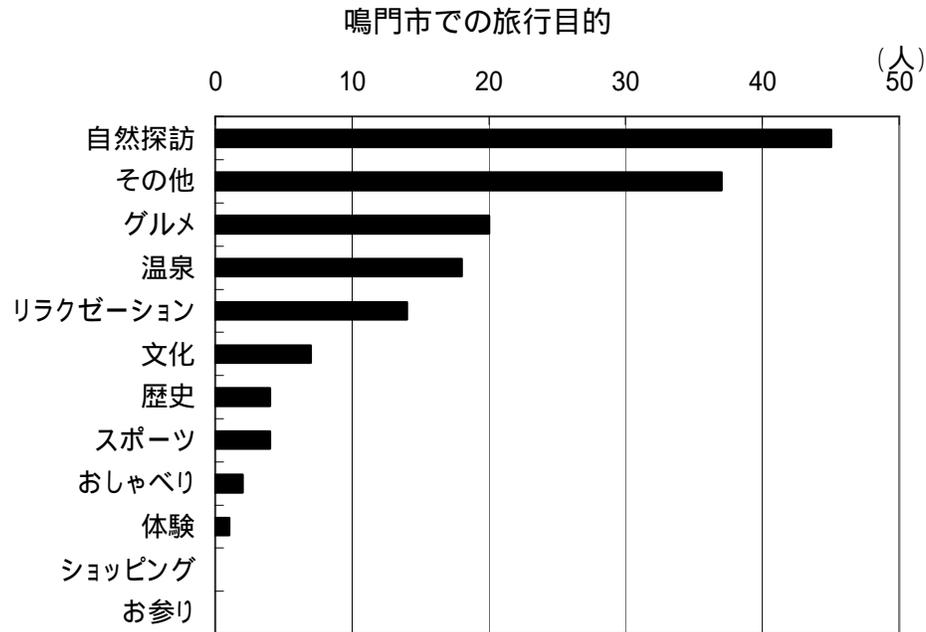


資料：平成18年版 徳島県観光調査報告書

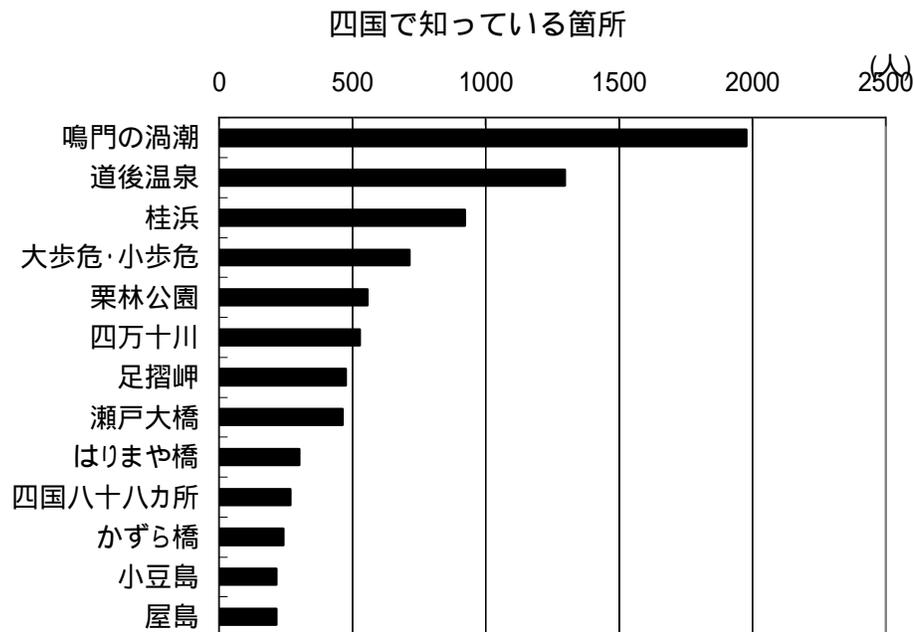
旅行目的

鳴門市への観光客の目的としては、自然探訪（渦潮）が最も多く、その他を除くと、グルメ、温泉、リラクゼーションの順となっている。

また、「鳴門の渦潮」は、徳島県内のみならず、四国を代表する観光資源と位置づけられていることが分かる。



資料：瀬戸内三都市 広域観光振興周遊ルート可能性調査

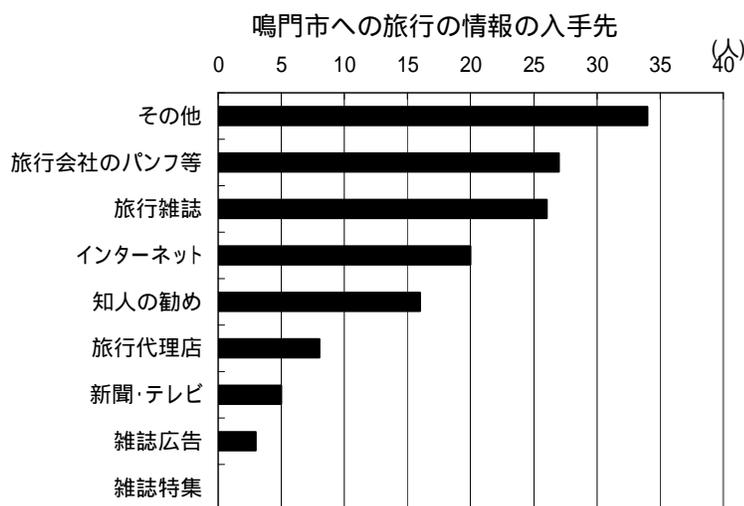


資料：「オンリーワン徳島」行動計画

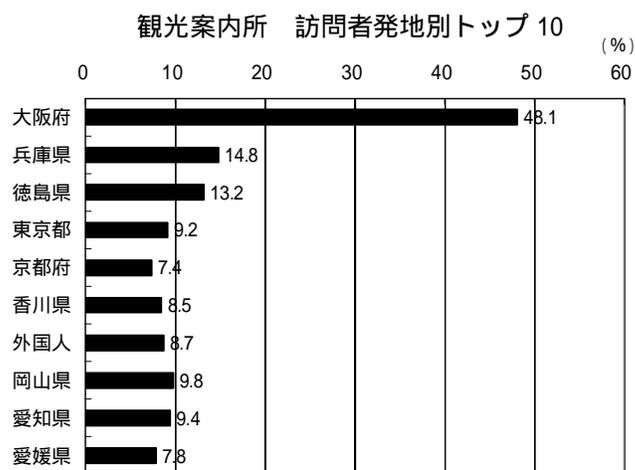
観光振興事業、宣伝・キャンペーン、サポート活動

鳴門市では、観光協会を中心として観光事業の育成、誘致宣伝、情報発信などの観光振興事業を進めてきた。また、「ふるーあ鳴門」の観光案内所では、電話での問い合わせに加え、対面式で観光客のニーズに沿った観光案内に応じているが、ここの訪問者の約半数が大阪府からの観光客であるのは、高速バス停周辺に位置しているという立地が大きく影響しているものと考えられる。

以下の「瀬戸内三都市 広域観光周遊ルート可能性調査」の結果でも見られるとおり、鳴門市を訪れる人が地域情報を入手した手段としては、「旅行会社のパンフ・ポスター」、「旅行雑誌」、「インターネット」の順に多い。観光協会や行政から、旅行会社や観光関連事業者への積極的な情報提供が大きな効果を与えることがうかがえる。



資料：瀬戸内三都市 広域観光振興周遊ルート可能性調査



資料：鳴門市商工観光課

平成 17 年度に行われた主な観光キャンペーン、宣伝活動等

名称	場所	期間	主催者	事業内容
05 食博覧会・大阪	インテックス大阪	平成 17 年 5 月	食博覧会実行委員会	地場産品及び観光 P R
瀬戸内四都市広域観光推進協議会 P R 事業	倉敷美観地区	平成 17 年 10 月	瀬戸内四都市広域観光推進協議会	街頭キャンペーン
徳島県観光市町村連絡協議会観光キャンペーン	大阪府豊中市（せんちゅうパル）	平成 17 年 11 月	徳島県観光市町村連絡協議会	地場産品及び観光 P R
瀬戸内四都市広域観光協議会 P R 事業	東京都有楽町（ふるさと情報プラザ）	平成 18 年 1 月	瀬戸内四都市広域観光推進協議会	街頭キャンペーン
渦開き観光キャンペーン	観潮船乗り場	平成 18 年 2 月	鳴門市観光協会	地場産品及び観光 P R
『バルトの楽園』四国内キャンペーン	J R 徳島、高松、松山、高知駅	平成 18 年 3 月	徳島県ほか	街頭キャンペーン マスコミ訪問
『バルトの楽園』鳴門ロケサポート協議会への協力		平成 17 年 10 月		鳴門ロケサポート募金への協力 『バルトの楽園を応援しよう！』のぼりの作製
A S A トライアングル交流圏推進協議会への協力		平成 18 年 3 月～ 4 月		第 23 回鳴門渦まつりでの P R 協力 A S A トライアングル観光パネル展の企画及び実施
その他誘致宣伝事業		平成 17 年 6 月		2005 中国青島・亜太（アジア太平洋）国際観光旅行博覧会への出展

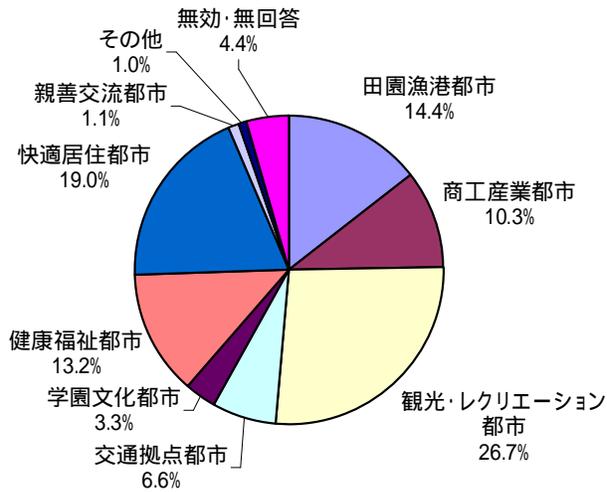
資料：鳴門市観光協会「平成 18 年度 鳴門市観光協会総会」資料より一部抜粋

市民アンケート調査結果に見る観光振興への期待

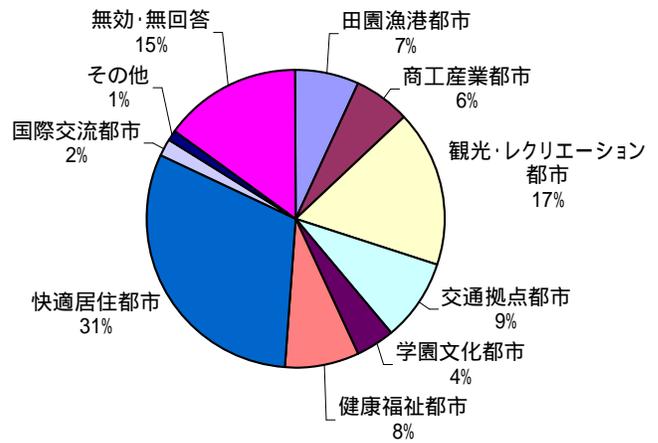
第五次鳴門市総合計画策定にあたり平成 14 年に実施した市民意識調査によると、市民は鳴門市の将来像として「観光・レクリエーション都市」（約 27%）を最も望んでおり、「観光・レクリエーション都市」の割合は平成 9 年の調査結果と比べて、約 10 ポイント上昇している。明石海峡大橋の開通などもあり、市民による観光振興への期待が高まってきている。

鳴門市の将来像

(平成14年)



(平成9年)



資料：鳴門市市民アンケート調査結果

第五次鳴門市総合計画策定における市民ワークショップでの意見

育てる：交流による国際性豊かな人づくり、伝統と文化の保護育成、教育の充実

- 名所・伝統産業のPRと目玉づくり
- 観光都市としての整備、地場産業のPR
- 歴史街道（撫養街道等）の発掘、観光利用
- 祭りなど市全体のイベントを増やし、活性化を図る
- 世界、日本全国に向け、インターネット等をフルに使ったPR
- 観光地間を公共交通で結ぶ
- 海辺、里山の民宿ネットワーク
- ドイツ館周辺の整備（ドイツ村、ドイツ兵遊歩道、粟田山道ウォークなど）
- わかめの製造工程を見られる施設の整備
- 民話探訪ハイキングコースづくり、古代ロマン探訪コースづくり

遊ぶ：地形を活かした鳴門ならではの観光都市づくり

- 海を活かす（海岸の駐車場整備、公園整備、海洋スポーツ普及、ヨットハーバー・カヌー乗り場の整備、海峡横断水泳大会の実施など）
- 漁業を活かす（体験漁業、魚まつり、大規模釣り大会、朝市の開催など）
- 自然を活かす（鳴門ならではのレジャー施設づくり、鳴門スカイライン・大毛島東側道路沿線の整備、島田島の整備、ホテルの住むまちづくり、自然教育の場づくりなど）

(3) 鳴門市観光の課題

本計画策定委員会及びワーキンググループでの意見交換、観光協会アンケート等から浮かび上がった課題を整理すると、以下のとおりである。

< 観光資源の再発見 >

鳴門本来の良さ（食べ物、地域自慢）などが発揮できていない面がある。

体験型施設、体験メニューが少ない。

暮らしの風景、鳴門の日常・非日常を売り出していくべき。

リーズナブルでお気軽感のある食べ物を売り込む仕掛けが必要である。

四季を通じてイベント等を開催し、リピーターを呼ぶ工夫が必要。

< 情報発信 >

観光都市としてのイメージが固定化されている（クチコミ・穴場情報が少ない）。

いい企画をどんどん TV や雑誌に売り込んでいく努力が必要である。

ネットでの情報を拡充するべき。

魅力の新たな見せ方は重要である。

< 市民協働 >

魅力ある資源を活かし切るための情報提供、市民協働によるボトムアップの体制づくりが未整備である。

まずは市民や県民の意識を変え、地元に関心を持たせ、誇りを持つ人を増やす工夫が必要である。

市民に親しまれ、支えられる観光施設としての関係構築が重要である。

< ネットワーク >

観光資源が“ 点在 ” しており、面としてのつながりが保たれていない。

高速バス等で訪れた人が鳴門市内を巡るための交通手段が少ない。

関西圏からは日帰り観光が可能であり、市内の周遊性・宿泊に結びつかない。

神戸など、他地域でのイベントを利用して鳴門へ人を惹きつける工夫が必要である。

通過型とならないように、ターゲットを定めて巡るコースを提供すべき。

(4) 鳴門市観光のポテンシャル

本計画策定委員会及びワーキンググループでの意見交換等をもとに、鳴門市ならではの観光の魅力、ポテンシャルを整理すると以下のとおりである。

< 資源の魅力 >

第九の初演地、大谷焼や世界有数の美術作品を陶板画で再現し一同に集めた大塚国際美術館など、文化・芸術の一流のものが集まる拠点として世界に向けた情報発信が可能である。

古代・中世から近代・現代に至るまでの歴史を町中で味わえる資源がある。

鳴門には、全国どこよりも新鮮でおいしい食材がある。

イモ畑の葉が風に揺らぐなど鳴門の人には日常の風景が、都会の人には非日常の魅力となる。

古い町並み、夕日のスポットなど、市民でも気が付いていないまちネタが豊富である。

< 情報発信力 >

渦潮が全国的に知られ、四国を代表するネームバリューを有している。

< 市民力 >

四国八十八ヶ所巡りの始点として、「お接待」の心が生活のなかに息づいている。

阿波踊りや渦まつり、「バルトの楽園」ロケサポートなどに見られるように、住民の団結力と底力がある。

市内にさまざまな市民活動団体があり、国際観光・バリアフリー観光を進めていくうえで十分なサポートができる基盤がある。

< ネットワーク力 >

関西圏からの四国の玄関口に位置し、自動車交通の利便性が高い。

東は静岡までがターゲットエリアと成り得る。

四国八十八ヶ所巡りを通じて、四国各地とのネットワークならびに高野山・関西とのつながりの要所となっている。

ドイツや中国との国際交流の取り組みを行っている。

(5) 課題とポテンシャルから見えるもの

指摘された鳴門市観光の課題とポテンシャルから、次のような方向性が見えてくる。

